

梅棹忠夫著 『モゴール族探検記』

この本は「京大カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊」に参加した著者がアフガニスタンで経験した様子を記録した紀行である。渡航が自由化される前であったから、当時は海外に出ることすらも容易なことではなかったであろう。

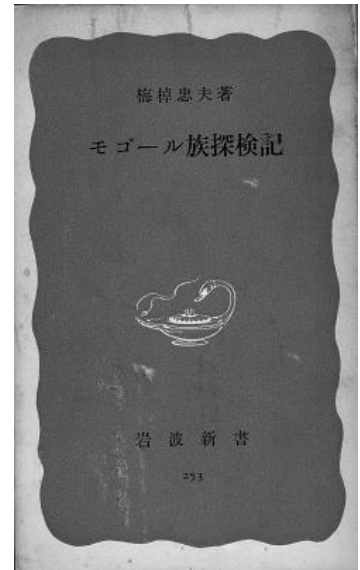
ロシアのアフガニスタン国境を踏査したフィンランドの言語学者の報告によれば、この辺りには奇妙な未だ世界に知られていないモンゴル語系らしき言語を話す部族が住んでいるらしいということで、この報告に興味を持った著者達は、その報告を分析したところ、文法構造が日本語に非常に近い、それでは一丁探検して同じアルタイ語系起源ではないかと言われていた日本語のルーツを探し出してやろうということで、人類学的探検班を組織したのである。しかし、そのモゴール族と思われる部族がどこに住んでいるのかなどは全く雲を掴むような話であったようだ。

添付されている踏査地図には、「未探検地域」と記された表示が沢山あり、アフガニスタンの僻地は当時はまだまだ鬼が住むか蛇がすむかの秘境であったのであろう。アフガニスタンに入国して、「モゴール」というキーワードで目的の場所を聞き廻るが、やっと聞き出した情報は全く不正確で、どこをどうやって行ったらいいかも分からず、行ってみたら全く別の場所だったなど、探検につきものの苦労も沢山書かれている。また、この辺りは古今より東西交渉の要衝であったから、使われている言語も多岐にわたり言葉を覚えるのも大変であったそうだが、探検の面白さはこのあたりにもあるのであろう。異国趣味と言えば語弊があるが、「探検記」や「秘境物」はやはり、次に何が出てくるのか、その先はどうなっているのか、などなど興味尽きないものがある。

この本を最初に読んだのは高校1年生の時であった。何分田舎の山奥のこととて、外国などの話題には全く無縁な生活で、おまけに家にはテレビなどという文明の利器も無かったので外国の映像に触れる機会も皆無だった。アメリカの大統領がナントカいう若い人に替わったらしいというくらいの知識しかなかったが、この本に触発されて「高校社会科地図帖」などを引っ張り出して、地中海から東に続く砂漠地帯やシルクロードの国々への想像を逞しくしたものだった。地名なども「なんだかバード」やら「なんやらスタン」などいかにも砂漠の最果てというエキゾチズムに魅せられたものだった。リタイアして海外登山もできるようになったが、私の関心はどちらかといえば登山の方は従で、現地の人々の暮らしの方に興味があるのは、この頃読んだ探検記の影響であろうか。

現今では、「探検」という言葉は死語に近くなっている。確かに地理誌上の空白地域はもはや存在しない。この本が書かれた50年前でさえも、著者は「地理的探検という意味では、現代はもはや探検の時代ではない。しかし、人類学的探検ということになると、それはまだ始まったばかりである」と書いている。

私事で恐縮であるが、高校生の頃から探検記を読み漁っているうちに、文化人類学に興味を持つようになり大学はこの方面に進みたかったが、当時はこの方面の学科は東大と京大にしかなくて、貧乏百姓の倅にはそのようなアタマもゼニも無かった。やっと、リタイア後に放送大学に入り直して多少の文化人類学の勉強をすることができたが、事情が許せばどこかの大学院に入学してもう少し専門的な勉強をしてみたいものである。また、チベットに青海鉄道が通じ交通が便利になった今、機会があればシルクロードをヨーロッパまで旅してみたい。 岩波新書 1956 年刊。



(2007 年 3 月 記)